

医療保健学部医療栄養学科の授業評価結果に対する考察（平成 25 年度）

副学長・医療保健学部医療栄養学科長
小西 敏郎

1. 授業評価に関して

- 講義・演習科目及び実習・実験科目においては、ほとんどの項目が高い評価であり、しかも、学生自身の態度だけでなく教員の姿勢や教育方法・内容についても評価は高くなっております。
- 講義・演習科目の授業においては、個々の項目別にみればおおむね良好な評価であり、「教員は授業に熱意を持って臨んでいたと思うか。」「教員は限られた授業時間を適切に活用したと思うか。」など「教員の姿勢について」の項目は好印象を与えている。しかし「主として板書による授業が行われた場合には、わかりやすい板書であったと思うか。」や「パワーポイントやその他の資料等を使用した場合には、その実施内容はわかりやすかったと思うか。」あるいは「プリント等が配布された際にパワーポイントによる説明を聞くだけではなく、授業内容の要点を書き留めるよう予め指示等があったと思うか。」などの「教員の教え方について」の項目に対してやや不満が見られます。これらの個々の指摘・評価を踏まえ、各教員は授業内容・方法の改善に向けて努力してまいります。
なお、「この授業内容は将来役立つと思うか。」について多くの学生が肯定していることから、当学科の教育内容を受容しているものと思われれます。
- 全体としては、多くの授業科目において高い点数が記載されており、個別的にも、とくに問題となる授業が行われているような評価結果ではないので、当学科のすべての授業において、学生が自分たちの将来を見据えて、集中して授業に取り組めたものと判断しております。また、各教員においてはこれらの評価を踏まえて担当科目の授業の改善・工夫に一層努力することといたしております。

2. 授業において工夫した点について

各教員は、医療栄養に関するより最新の情報を伝えながら、学生の学修意欲が高まるように、そして緊張感をもって学生が授業に臨めるように、講義に改善を加えている。また学生の理解度に注意しつつ講義を進行するために、以下に挙げる様々な方法で、改善を加えている。今後は単なる講義形式の授業からできるだけ多くの学生に発言の機会を与えて、双方向授業となるように目指していきたい。

- ① 昨年から 3 年次生に対し、臨地実習の前に OSCE (Objective Structured Clinical Examination: 客観的臨床能力試験) を導入した。これにより、臨地実習で患者と接しても失礼のないよう、また病院での臨地実習が十分な臨床的な実習を行うためのトレーニングの場となるように、さらに改善

していきたい。

- ② 1 年次生・2 年次生の授業でも、ときには関連する国試問題を取りあげ、早期から管理栄養士の国家試験への取り組みの重要性を意識させることにした。
- ③ 授業開始時に前回の授業内容についての小テストを行ったり、あるいは授業途中や終了時にその日の授業内容の小テストを行ってきているが、その回数を増やした。また小テストの回答内容を発表・討論するようにし、参加型の授業となるように工夫した。
- ④ 演習や実験あるいは大クラスでの授業では、マイクだけでなく、できるだけ大きな声で授業を行っている。
- ⑤ スライドやテキストを準備し、実習・実験内容がより理解できるような授業を心がけた。この際、穴埋め方式、記入式として学習意欲の向上を図った。
- ⑥ 提出されたレポートは詳細にチェックし、論文のまとめかた、データ整理方法を詳細に、かつ親切に指導した。
- ⑦ 科目により、専用ノートを持たせ、テキストから重要と思われる部分を手書きで図や表を書かせ、印象を強くさせる工夫をした。
- ⑧ 科目によっては、グループで考えて全員が満点をとるまで学ばせる方法で、学生が達成感を味わうように、また授業内容への理解と関心を高める工夫を行った。
- ⑨ 「調理学実習」においては、例年ノロウィルスの多発する前の時期に、実習開始前に消毒液を用いて実習台の清掃をすることの意識付けを行ってきた。平成 25 年度は、さらに生食する野菜の消毒を取り入れ、手指の消毒度合いを「手洗いチェッカー」を用いて確認して、衛生管理の意識付けを例年以上に高めた。

3. 今後の授業について

- 今回の学生の意見を真摯に受けとめ、学生が学ぶことの楽しさや学び方に、興味を持って取り組めるようにさらに授業改善に努めていく。また、双方向の授業形態とすること及び画像を多く用いた授業とすることを心がけたい。
- 医療栄養学科においては、これからの医療栄養学は各種疾患の治療食のみならず、予防・健康維持のための栄養管理が求められていると考えている。したがって当学科での教育内容としては、「おいしいものを作る」ことを基本として、更に「健康増進のためのバランスの良い食事作り」を目標にしている。すなわち各種の疾患を念頭に置いた調理、栄養を目指しているので、「病理学」や「臨床栄養学」の授業のみならず、「病院における臨地実習」、及び3 学科合同でチームを作って検討する「協働実践演習」などの必修科目を通して、医療現場に触れる機会をできるだけ設けて、さらに疾患や医療への関心が高まるように教育を行ってまいります。

4. 学生に対して

- 学生は全般に「やさしく」「わかりやすく」「親切に」と、教員に甘える・依存する気持ちが強いように感じられる。一方厳しい、難しい授業においても、何人かの教員への自由記述のなかに見られるように、教員に熱意・真摯さが感じられる場合は多くの学生がその教員個人に対して感謝の言葉を記載している。大学生の教育においても学生に対する思いやり・愛情が重要であるのはもちろんであるが、学生も特定の教員に限らず、教員の努力・熱意を理解していただきたい。
- 当学科のいずれの教員も、能力、意欲に大きく個人差のある学生諸君に対して、すべての学生が学ぶことの楽しさや学び方に、興味を持って取り組めるように熱意をもって授業改善に努めて取り組んでいる。学生諸君は、それをよく理解して、授業中に自分が理解できないことがあればみずから質問し、不満があればその都度教員に伝えてもらいたい。むしろ教員が質問はないか問いかけても反応がないことが多い。もし、授業中に質問するのは恥ずかしい、気後れがするようならば、授業終了後でも構わないので、どんどん質問し、また意見を述べてほしい。

5. その他

予め配布されているシラバスと実際の教育内容が異なることがあるが、年々変化する医療栄養の分野では時宜をえた最新の情報を伝えなければならぬことも多々あるので、授業内容や順序が変わることがありうることを理解していただきたい。